

---

# マジックリン王国物語

珠虹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マジックリン王国物語

### 【Nコード】

N9316A

### 【作者名】

珠虹

### 【あらすじ】

剣の国と魔法の国が対立している世界。魔法王国マジックリンの王子を取り巻く日常を中心としたファンタジーな物語。

001 プロローグ (前書き)

最終的には壮大な物語になっている予定(！?)です。長い目で見  
てやって下さい、よろしくお願いします。

## 001 プロローグ

剣と魔法が対立する世界。

剣は魔法を切り裂く。

魔法は剣を破壊する。

相反する二つの力。

やがて、二つの力の間で対立が起きた。

そして、人間は二極に別れて、別々の国を作った。

剣を信じる者たちは、龍の力を借りて『ソーディアン王国』を。

魔法を信じる者たちは、聖霊の力を借りて『マジックリン王国』を。

二つの国では衝突は今現在も続いている……。

\*\*\*

時は魔法歴704年。

マジックリン王国が建国してから、もう700年が過ぎた。

隣国のソーディアン王国との戦争は、休戦状態がかれこれ15以上続いている。

なので、国内は数百年ぶりに平和な時代がおとずれていた。

……だが、街のど真ん中にそびえ立つ巨大な王城では、毎日ちよつとした争いが起きている。

「王子はどこに行ったー!!」

「王子ー！出てきて下さいー！」

王城のあちらこちらから、声があがる。声の主たちは城に使える執事や侍女たち。

みんな声を張り上げて、

「玉子、玉子」

と叫んでいる。

「玉子じゃない王子だー！！」

立派な顎髭を生やした初老の男が叫んだ。黒いローブを着て、手には背丈ほどの気の杖を持っている。

「……………アジリアニ様？急にどうしたんですか？」

アジリアニと呼ばれた初老の男の横で、怪しむような目に見ている。この男は緑のローブを着ている。

「……………うっ、うるさい！なぜか叫ばなきゃいけないような気が……………  
そ、そんなことより、さっさと王子を探さんかっ！」

「うう、そんなに大きな声を出さなくても……………しかし、王子様も困ったものですね。修行の最中に逃げ出すなんて」

「全くだ。力はあるのに学ぼうとしない」

アジリアニは大きな溜め息をついた。

あの王子には手を焼いてばかりだ。最近は抜け毛も増えてしまった。

「そうですねえ、毛は大事ですものね」

「カシス貴様……人の心を読むなど何度言ったら分かるんだ!!」

アジリアニが杖を振り上げた。

「ひい!ごめんなさい」

カシスと言う名の緑のローブの男が逃げ出す。

「許さんぞ!ゴニヨゴニヨ……『サンダーボール』!」

アジリアニの杖から雷の球が生み出された。

そして、それは宙を飛びカシスの背中に直撃した。

「ギャアアアアアア!」

カシスの体の骨が透けて見えるほどの雷撃。

「天罰じゃ」

アジリアニが満足して頷いていると、1人の侍女が走ってきた。

「アジリアニ様っ!王子が見つかりました」

「なにい、本当か!して、どこにいるのだ?」

「それが、その、……王城のてっぺんに」

くらあく。

アジリアニに目眩が襲ってきた。

「王子はそんな所で何をしてるんだ！」

アジリアニは怒鳴った。侍女は恐縮してしまった彼女にとっては八つ当たりもいいとこだ。

「わ、分かりません。ずっと遠くの方を眺めているだけで……」

「まあいい……行くぞ、カシス！」

だが、返事はない。

彼はさっきの魔法で、全身黒こげで倒れていた。

「ちっ、根性なしめ。あの程度の魔法で気絶しおって。おい、お前案内しろ！」

「は、はい！」

侍女は駆け出していく。アジリアニは後ろから着いていく。が。

「ひい、ひい。ちょっと待っててくれい。た、体力が……ひい、ひい」

「あ！す、すいません。ゆっくり行きますね」

「すまん。年には勝てないな、若い頃はこんな……」

と、アジリアニの昔話をしながら、二人はゆっくり王子の所へ向か

った。

この国を、この世界の運命を背負っているかもしれない王子のもとへ。

001 プロローグ (後書き)

感想などございましたら、ぜひお願いいたします。

002 魔法王国の王子（前書き）

今回から王子視点です。

002 魔法王国の王子

遠く…あの地平線より遠くに、本当に違う世界があるんだろうか。

この魔法王国とは違う。剣が深く根付いている王国が 本当に。

「言ってみてー!!」

気付いたら叫んだ。

また見たことのない、もう一つの世界に向かって。

「くらー！王子ー!!」

下の方でアジリアニが叫んでる。

ちっ、見つかつちゃったか。

「くらー！降りてきなさい!!」

「分かったよ！すぐに降りてくから!!」

そう言つてオレは中を舞った。……ようするに、飛び降りだ。

「なっ!?!」

アジリアニたちが驚きの声をあげる。

ビュオオオオオ

地面まで、たった数秒のダイビング。

風を切り裂く音が耳に心地いい。

「王子！危ないっ！」

誰かが声を荒げた。

全く要らない心配だけだ。

「風の聖霊よ、我と大地との境の空圧を高めよっ、」エアークッション『！』

バアーン

オレの体が空気のクッションによって跳ね上がる。

そして天地が逆さまのまま、落ちていく。

「王子、大丈夫ですか!？」

アジリアニが駆け寄ってきた。どうしてこの城の人間は心配性ばかりなんだ？

オレは頭を押さえながら、立ち上がった。

「全然大丈夫。ちょっと頭は痛いけど」

すると、アジリアニの顔が一気に青ざめていく。頭打ったぐらいで一体なんだ。

「あ、あ、」

アジリアニは金魚のように口をパクパクさせて、オレの足元を指さしている。

ん？んん！？

オレの足元には、父上が大事にしている壺が。  
……粉々になつてた。

「げ！……逃げるか」

オレは一目散に逃げ出した。

「……………王子……！」

一瞬間をおいて、アジリアニが追いかけてきた。

こりゃ、捕まったら説教だな。トホホ……。

今オレは、王城内の図書室にいる。  
あの後、すぐにアジリアニに捕まってここまで無理矢理連れてこられた。

「さて、王子。なぜあんな所に登ったのです？ 拳げ句の果てには先代の国王が大事にしていた壺まで壊してしまつて……怒られるのは、教育係りの私なのですぞ？ ハア……あなたのお兄様は私を困らせたことなどなかったのに」

「だ、だって魔法の修行ばっかで退屈だったし。  
それに……地平線の向こうにある剣の国を見てみたかったんだ！」

アジリアニは困った、といった表情をしてため息をついた。

「またそんな事をいって……ハア。あんな剣を信じている野蛮な国なんてくだらない。それに今こそ平和ですが、休戦中だけで、またいつ戦争が始まるか分からないのですよ」

「そんなことは分かつてる。だけど、見るぐらいいいじゃないか！  
いつか剣の国にも行ってみたいとも思つてる」

アジリアニが目を丸くして驚いた。

「剣の国に行く！？ 馬鹿な事を言つてはいけません、王子。それに向かうの国では、国民全員が剣を持っているのです。剣を持たない王子が行つても、すぐに捕らえられてしまいます」

「だったら剣を持っていけばいいじゃないか！」  
またアジリア二が驚く。はらりと髪の毛が一本地に落ちた。

「剣を持つですと！？あんな野蛮な物など触れる事すらしてはいけません。この国では700年も前から禁止されておるのですぞ！全くふざけたことなど言っていないで、さっさと修行に入りますよ。これいじょう私の髪の毛を無くすわけにはいきません。髪は私の命ですからね、ハア」

最後にこれでもかというぐらい大きい溜め息をついて、アジリア二は椅子に座った。

「さあ王子。そこの椅子に掛けて下さい」

そう言ってテーブルを挟んで向かい側の椅子をさす。

テーブルの上には火や雨、森などの絵が描かれた本が開いている。

「魔法とは精霊との干渉によって生まれます。そのためには精霊にしっかりとした、魔法のイメージを伝えなければなりません。でするので、この火や雨の絵をみて魔法のイメージを作りあげる訓練をします」

アジリア二は焚き火の絵を指さす。

「いいですか？この炎の絵を見て、しっかりと覚えて下さい。……覚えてましたか？では目をつぶって、瞼の裏に今と同じ炎をイメージして下さい。……出来ましたか？そうしたら次にその炎の形を自在に操ってみてください……」

オレは目を閉じ、イメージした炎をぐにやぐにや変化させていく。

まずは……こんにゃくだ！プルプルプルル！

数分後。

「……なあ、アジリアニ？」

「なんでしよう？」

「なんでいまさら、こんな簡単な事やらなきゃいけないんだ？」

「？仕方な……じゃなくて、基礎が一番大事だからです！無駄口たたかないで、さっさとやりなさい！」

そう言われて、オレは再び炎をイメージする。

まあ世の中、色々事情があるのだ。気にしない。さて……次は昆布だ！それ、ユーラユーラ。

それまた数分後。

「……なあ、アジリアニ？」

「なんですか？」

「15年前はさ、父上と一緒に【白のアジリアニ】って呼ばれて、戦場で活躍してたんだろ？」

「随分昔のことですがね。いまや前国王様も私も、大分力が衰えてしまつて隠居生活ですよ」「

「そーかあ。で、さ……剣の国って強かったの？」

アジリアニが、チラリとオレの顔を覗いた。

この老人が、最強と言われていた時代があつたなんて想像できない。

「また剣の国の話しですか……。まあ、強かったですね。あの国の人間は生まれたときに、龍と【血の契約】を交わすことで、卓越した身体能力を手に入れますからね」

龍とは、古代から存在する巨大な生物。魔法とは違った力で自然を操る。

「それに龍の力を宿す剣を持っている【九本の王剣】という部隊は特に強力でした。我が国の【カレードナイツ】と並ぶくらいの力を持っておりました。背中への傷はその中の1人に負わされたものです」

アジリアニの背中には大きな傷がある。背中を2つにぱっくり割ったような傷が。

「あの戦争を経験したら、剣の国に行きたいなんて思わないでしょう……王子？」

「す、すごいな！剣の国には龍がいるのか。見てみて〜！行ったら見えるかな？」

ガタン！

アジリアニが席をたった。こめかみに青筋が浮いている。

「まだ、そんな事を言っているのですか！いい加減にしなさいっ！

……ハア、今日の修行はこれで終わりにします！」

アジリアニが肩を怒らせて、図書室から出ていった。

「ハア……」

戸を通して、アジリアニの大きなため息が聞こえる。

「まあた、怒らせちまったか……」

オレは立ち上がり、窓の方に向かった。外は夕日で茜色に染まっている。

だけど、水平線の向こうの景色は昼間と変わらない。

あの向こうに。あの向こうの違う世界をこの眼で見たい……

004 旅立ち(前書き)

やっと王子の名前が出てきました、これで序章は終了です。

004 旅立ち

「呼びましたか？兄様」

とてつもなく高い天井。それを支える、巨大な柱。所々に金や宝石の装飾が凝らされている。

ここはマジックリン王国で、一番の権力者が息づく場所。そう、国王の間。

オレは兄である現国王、リカイ・クラウンに呼びだされている。

「ああ、悪いな」

オレより数段の階段を登った、少し高い位置に置かれた豪華な椅子。そこに兄様は腰を下ろして、座っている。

「いつも思っただけど……その椅子、堅くない？」

兄様は軽く微笑む。

「ああ、堅い。すぐ腰が痛くなるんだよ」

「へえ〜。……で、何の用？また前みたいに、街で怪しい本買って来いって言うんじゃないよね？」

また兄様は笑う。

威厳のまるでない顔は、昼間の謁見中の時から想像もつかない。

「はははっ。まあ真面目な話だ、よく聞け。」

急に兄様の顔が真剣な顔つきになった。

オレはゴクリと唾を飲む。

「アジリアニから聞いたんだが……お前、最近剣の国の事ばかりらしいな」

「うっ……うん」

「何がお前をそうさせている？」

理由？

それはたった1つだ。

「見てみたいんだ、違う世界を」

兄様と視線が重なる。

見透かされるような深緑の瞳。

「そうか……じゃあ旅に出ろ」

「……へ？」

予想外の言葉。

オレは思わず、間の抜けた声を出してしまう。

「分からなかったか？お前の好きな所に行っってこい。お前の好きな世界を見てこい。っつて、言ってるんだ」

「いいの？」

「ああ」

「やったー！兄様、ありがとう！」

オレは思わず飛び上がってしまった。

行けるんだ。夢にまでみた、地平線の向こうに。

「あ、ちなみに1人じゃないからな。護衛をつける。入れ、カシス」

扉が開いて、緑のローブを着た男が入ってきた。

「カラードナイツ、【緑のカシス】参りました」

カシスは数歩前に歩みでると、オレと兄様に向かって膝をついて言った。

「畏まらなくていい。弟を頼んだぞ、カシス」

「はっ！国王様。この命に代えてでも」

カシスは立ち上がって、体の前で腕を2回振る。マジックリン王国式の敬礼である。

「よし。じゃあ2人とも下がっていいぞ。明日の朝一番に旅立て」

「かしこまりました、国王様」

「ああ。本当にありがとう、兄様」

「アジリアニには内緒になー！」

兄様のその言葉を背にして、オレ達は国王の間を後にした。

……………ガチャ

しばらくして2人と入れ替わりに、黒いローブの男と紫のローブの男が国王の間に足を踏み入れる。

「カロードナイツ、【白のアジリアニ】参りました」

「同じ、【紫のゲルニカ】参上しました」

一方はアジリアニ。もう一方は、ゲルニカという背の高い若い男。

「本当に行かせて良かったのでしょうか？」

国王の顔が影がかかったように薄暗くなる。

「ああ、【闇】の方の動向が掴めないからな。もしかしたら、ソーディアンと手を結ぶ可能もあるし」

「しかし王子を敵国に送るなど！護衛もカシス1人では……………あやつはまだ未熟過ぎます！」

アジリアニが声を荒げる。ゲルニカは黙ったまま2人に交互に視線を送っている。

「大人数だと逆に怪しいだろ？それにカシスの力は、お前が一番認めてるはずだ、アジリアニ」

アジリアニは不安と不満が混じり合ったような表情で押し黙ってしまふ。

「それに、ゲルニカも後ろから尾行するしな。まあ、大丈夫だろ。なあ？」

国王は笑っている。広い空間に声が反響する。その瞳の奥には、調和か野望か。はたまた虚無か。

「あいつならやってくれるさ……」

反響した音は互いに干渉し、渦巻き、飲まれ、そしていつの間にかき消えていった。

\*\*\*\*\*

出発の朝。

オレとカシスは巨大な門のしたにいた。まだ太陽は半分しか姿を見せておらず、空気が新鮮味を帯びている。

「ふあああ」

オレは大きな欠伸をした。結局、昨日はあまり眠れなかった。隣でカシスも目をこすっている。

「いよいよ出発ですねえ、王子」

緑のローブに小さな荷物袋を肩に背負い、カシスは長く続く道を見

て言う。

まだ城下の家々が連なっている道ではあるが。

「……あのさー、カシス。もう旅の仲間なんだから、王子って呼ぶの止めてくれよ」

「！……はいっ！行きましようか、ウラク様」

地平線の先までの栄光の旅の始まり。

彼らの、彼の前には、まだ見えない遙かに長い道が続いている。

「よし、行くか！」

そして今、始めの一步を踏み出した。

それと同時に、運命という歯車をも廻して。

005 港町で

旅立ちから二週間が過ぎようとしている。

今ウラクたちは、マジックリン王国領内の

「リカナルト」

という港町に来ていた。

「おー！海だー！」

ソーディアン王国に向かう予定は後回しに、ウラクの一方的な意見で、まずはマジックリン王国内の色々な場所を見てまわる事になった。

「ウラク様は海を見るのは初めてですか？」

最初は鮮やかだったカシスのローブも旅の最中に色褪せ、所々に土汚れやほつれが目立っている。

「ああ、広いな」

旅に出てから色々な物を見た。全てが新鮮だった。何度も危険な目にあっただが……。

「そうですね、世界の七割は海だと言われていますから……って、何やってるんですか!？」

ウラクは目を閉じて、詠唱を始めた。大気がピリピリと震えだす。

「……聖なる水の精霊よ、汝の腕を振るい水面に鋭い棘を……【ウ

「オーターレイ」

海面がざわざわとうねりだした。岩礁にいた海鳥達が一斉に飛び立つ。

しかし、何も起こらない。

今使った魔法は、水面にから巨大な水の槍を出現させるはずなのだが。

「ウラク様……見境無く魔法を使つてはダメだって昨日言いましたよね？いい加減にしてください！あなたの魔法で何回危険な目にあつたか……」  
カシスは肩を怒らせ、細めの目をつり上げる。

「突然台風を生み出したり、山を半分消滅させたり、大精霊に戦いを挑んだり……貴方はまだ魔法の危険な部分を理解していない！」

「カシス……」

「強力な魔法には強大な魔力が必要なんです。その身に見合わずに強大な魔法を使用してしまつたら、命を落とす事になるんですよ」

「……………」

「…………ウラク様？聞いてるんですか？」

「…………なんで今の魔法は失敗したんだ？」

ウラクの頭の中はカシスの小言よりその事の方でいっぱいだったよ  
うだ。

「はあ……アジリア二様の苦勞が身に染みて分かりますよ……。今の魔法にウラク様は、水の精靈に干渉しましたよね？」  
「ああ」

突然だ。

水を使う魔法には、水の精靈の力が必要だから。

「それではダメなんです。海の場合は海の精靈には干渉しなければならぬんです。海の精靈は気難しいので……まあ心を交わすには長い時間がかかるでしょうね」

ウラクは海へと視線を下ろした。斜めに落ちていく太陽の橙が乱反射している。

「うーん……大いなる海に属する精靈よ、汝の息吹きで吹き上がる  
悽愴を……【アクアレイ】」

「……な!？」

ドオオオオオ!

激しい突発音と共に、天空へと突き刺さる水柱。  
ウラクが両手を上げて叫ぶ。

「よっしやー」

「なんて人だ……」

巻きあがった水しぶきで、服がずぶ濡れになってしまふ2人。  
夕日に照らされ大きな虹を消え入るまで見上げていた。

\*\*\*\*\*

その後、高く上昇した海水が港町に降り注ぎ、屋根を破壊し家の中を水浸しにし、過去に類をみない記録的な大洪水になったのは云々までもない。

006 山村で

旅立ちから三週間後。

ウラクたちは道に迷ったあげく、小さな山村にたどり着いた。

「本当にこんな所に人住んでるのか？」

山村とよんだ小さな家々は、ある家には大きな穴があき、ある家は半分崩れ落ちている。

人が住んでいるような気配はまるでない。

「おかしいですねえ。村の入り口には、確かに『カルミア村』という看板が立っていたのに」

「もうとっくに移住してるじゃ……ん？」

ウラクが言葉を止め、目を凝らす。

すでに日は落ちて真っ暗な山の中に、確かに灯りが見えた。

「火、だな」

「ええ、人がいるのかもしれない。行ってみましょう」

灯りの方に近づくと、大きな洞窟らしきものの前で焚き火が豪々と燃えていた。周りには人影はない。

「……誰もいないな」

ウラクが声を殺して言う。焚き火の奥の洞窟からはヒュウヒュウと風の通る音が聞こえてくる。かなり奥まで続いているようだ。

「！ウラク様、伏せて下さい！」

ビュウ！

洞窟の中から鋭く研がれた風の刃が飛んできた。ウラクたちが身を潜めていた木が、軽々と倒される。

「誰だ！？」

洞窟の中から人影が見えた。

焚き火の光を下から浴びているが、顔までは暗く影が張り付いていて見えない。

「ちつ……大地に眠る精霊よ、重なる響きをその力」

「ダメです！！ここは私に任せてください。ウラク様にやらせたら相手が死んでしまう」

「なっ！？そこまで力加減出来ないわけじゃないぞ！」

ウラクの言葉にカシスは軽く微笑み返すと、前に飛び出す。

ビュウ！

風の刃がカシスを襲う。しかしカシスは、体を横に捻って避ける。

ビュウ！

もう一度、風の刃が飛んでくる。

「緑の魔術師をあまり舐めないでもらいたい」

若草色の前髪が風に揺れただけで、風の刃はカシスの手前で掻き消えた。

「えっ!？」

洞窟の中から驚愕の声が上がった。声の主は女性、おそらくウラクとそう変わらない年頃だろう。カシスはその方角に向けて声をかける。

「貴女がどなたか存じませんが……村の様子は見ました。何か事件があったのですか？私は貴女に危害を加える者ではありません。出てきて話しを聞かせてもらえませんか？」

少しの沈黙。

「貴方達は盗魔団じゃないの？」

「ええ」

また何かを考えるように、沈黙。

そして、しばらくしてから洞窟の闇から、はっきりとした人物像が浮かび上がった。

やはり、まだ若い女だった。

「まだ貴方達を信用した訳じゃないわ。私の質問に答えて」

栗色の長い髪、その女は、同じ栗色の瞳を鋭くウラク達に向ける。

「名前は？」

「私はカシス・ディファ。こっちはウラクです。共に首都の出身です」

「首都の人間？なぜこんな所にいるの？」

「情けない事ですが……道に迷ってしまって、今晚泊まる所を捜していました」

「そう……いきなり攻撃してごめんなさい」

女は視線を和らげた。詫びるように小さく頭を下げた。

「いいえ。それより何かあったのですか？」

「ええ、その話しは中でしょう。何もありませんが、歓迎しましょう」

そう言って女は、魔法か何かで明かりをつけ、洞窟の奥へと入っていった。

魔法の明かりで灯された薄暗い洞窟の中を、三人は歩いていた。カシスと女が前を歩き、ウラクは浮かび上がる岩肌を眺めながら、後ろの方で歩いている。

「私はリシューマル・カウナよ、リシュって呼んで」

「はい。……ところでリシュさん？何故、洞窟の奥に向かうのですか？」

「……貴方達も村を見たでしょ？」

「はい……酷く荒らされていました」

リシュの顔が急に暗くなる。

「私の村は一週間前に、盗魔団に襲われた。だから私や村の人達は、この洞窟に隠れて生活をしてるの」

盗魔団。

魔法を使う窃盗団、一般的に盗賊と呼ばれる職種。

戦闘敵な一味は、村一つを破壊しつくすとも言われているが、まさにこの村はその餌食となったのだ。

「なぜ貴女一人で見張りを？」

「今この洞窟の中には、私しか攻撃魔法を使える人間がいらないんだ。村の男たちは全員やらちゃったから。私がいなくなると」

リシュは強く拳を握る。なんて強い女性なんだ、とウラクは思った。

「焚き火をしていたら、すぐに盗魔団に場所が分かっってしまうのでは？」

「この辺りは野獣が多いから火を焚かないと、洞窟の中に入ってくるの。奴らは闇眼が利くから、人間よりたち悪いし」

「そりじゃあ、今まで盗魔団は襲って来ることはなかったのですか？」

「来たよ、何回か。でもさっきみたいに、洞窟の中から魔法を打ち続けていたら諦めて戻っていった。こう見えて私、風の魔法は得意なんだ！貴方達には破られちゃったけど」

そう言っつてリシュは笑った。村人達を守るために自らを犠牲にしなから。

つられてカシスも微笑む。瞳の奥に強い苦悩を浮かべながら。

その後ろでウラクが体を振るわせた。それは恐怖からか、怒りからか、それとも悲しみからか。

「カシス、リシュ」

洞窟に入ってから初めてウラクが口を開いた。

「その盗魔団の所に行こう」

「そうですね。少しお灸を据えてあげなければなりませんよ」

二人の言葉にリシュは声を荒げる。

「何を……何を言っているの、貴方達は！相手は盗魔団なのよ！？」  
彼女の大きな瞳から、一筋の光が流れた。抑えていたものが溢れ出てきた。

「下手に手を出したら死んでしまうわ！父さんや兄さんだって……私は見てることしかっ……」  
リシュの声を体を震わせる。悲しみが怒りが。

「これ以上……これ以上、人が死んでしまうのは……耐えられない……」  
強く弱い彼女から溢れ出る小さな悲鳴。  
ウラクは唇を強くかんだ。

……知らなかった。この国で悲しみの涙が流れているなんて。涙は止める、二度と流させない。  
ウラクの指が、流れる涙をせき止めた。  
リシュが顔をあげる。  
ウラクは優しく微笑んだ。

「大丈夫。オレ達任せとけ」

「あれか？」

ウラクが指さす先には、木々に囲まれた古い遺跡のような建物。

「ええ」

「見張りはいませんか……警備は手薄ですか。どうしましょう？裏に回りますか、それともこのまま……」

警備が手薄な分、進入経路は何通りかある。

一番有効な方法を考えるため、カシスが頭を捻る。

「……私に考えがあるわ」

口を開いたのはリシュだった。

「なんです？……ふむ、……ふむふむ。……なかなか面白い。どうしましょう、ウラク様？」

\*\*\*\*\*

コンコン

盗魔団のアジトの戸が叩かれる。

居眠りをしていた見張りは音に気づき、戸を開けた。

「誰だ？」

「夜遅くすみません。著名な盗魔団があると聞いて訪ねました。私に宝石を売って頂けませんか？」

ドアを開けた先には、若草色の髪の子。

煌びやかに輝く宝飾品に身を包んだ、金持ちの良さそうな男だったので見張り役は男を中に入れた。

「ありがとうございます。これをどうぞ。一番上の人に合わせてもらえますか？」

男は見張り役に金貨を数枚渡して、そう言った。

「お？おっ！もちろんだぜ！へへっ、こっちだ」

見張り役は金貨を見るとすぐに不気味に笑い、男を奥に案内する。

\*\*\*\*\*

アジトの外壁にそって、ウラクとリシュは息を潜めて歩いていた。

2人はこっそり進入できそうな場所を探している。

リシュの作戦とはこうだった。

「まずはカシスが宝石商と偽って、奴らのアジトに入り込む。金に目がない奴らだから絶対に乗ってくるわ」

「しかし……宝石商を偽るだけの身なりもお金も持っていませんよ？」

「それはあれよ、魔法に姿形を変えるのがあるはずよ。貴方ならきつと使えるでしょ?」

カシスはなるほど、といった感じに頷いた。

「ふむ。ですが盗魔団に取り入ってからどうするんです?」

「そう、ここからがポイントよ。よく聞いて」

リシュが人差し指をピンと立てる。

「恐らく奴らは大量の利益に喜び、祝杯を始めるはず。私の村を襲った時もそうだった……。だから酔った時を叩けば、三人でも何とかなるかも」

「ふむふむ。なるほど、成功すれば面白いですね……。ウラク様、どうしましょ?」

「んあ? いいんじゃないか?」

とこう言う訳である。

「お?ここなんていいんじゃないか」

ウラクが半開きの小さな窓を見つけた。

中を覗くと食料庫らしく、大小さまざまな袋が積み重ねられている。

「……誰もいないようね。じゃあ、ここから入りましょう」

\*\*\*\*\*

騒がしい部屋。

辺りでは盗魔団たちが下品な笑い声をあげ、酒を酌み交わしている。

「ほう、宝石を買いたいだと？俺達が盗魔団だというのは知っているな？」

部屋の中央にある大きな椅子に座った男。おそらくこの頭首であろう。筋肉が付きすぎた肉体をだらしなく垂らせ、獲物を見るような目つきでカシスを見回している。

「勿論です、頭首様。私は良質な宝石を探しています……その為にはお金は惜しまない覚悟です」

カシスは懐から金貨が詰まった袋を取り出す。

もちろんこの金貨は【イリュージョン】という魔法で作られた偽物、本当はただの石ころだ。

「ほほっ、いいだろう。オイ、お前！アジト中から宝石集めてこい！」

金貨袋を見て、頭首はおもわず顔の筋肉を緩ませた。

リシュが言っていたように、本当に金に目がないらしい。

数分後。

手下達が両手に大量の宝石を抱えて戻ってきた。赤や緑の宝石が床へ散らばる。

「これで全部だ。確認しな」

カシスは宝石に手を伸ばした。拳ほどのサファイアやルビー、七色

に輝く幻の宝石レインシャインもあった。

「素晴らしい！それでは……これと、これ……これもですね……あとはこれを」

カシスは幾つかの宝石を手を取った。勿論、鑑定などしておらず、全て適当に選んだ。

「それだけでいいのか？」

「ええ、代金はこれでいかがでしょうか？」

先程と同じ大きさの袋を、懐から3つ取り出して床に置いた。

「よし契約成立だ！」

ここまでは作戦通りだ。カシスはほっと胸を撫で下ろした。

「と。その前に金貨の確認だ」

頭首の手が袋へと伸びる。

……これはマズい。

カシスは唾を飲んだ。

袋を開け、金貨を手を取った取った頭首の腕が震える。

「てめえ！どうゆう事だ？こいつは偽物だ！」

部屋中の盗魔団たちに緊張が伝わる。全員が刺すような目でカシスを見る。

「魔法での偽造は俺達の専売特許だぜ。この程度じゃ騙されない！  
……せて、どう落とし前つけるんだ？」

\*\*\*\*\*

ウラクとリシュは人気の無い廊下を歩いていた。遠くから騒がしい  
声が聞こえる。すでに祝杯があげられているのだろうか。

「あっちね」

リシュが声がする方へ進んでいく。盗魔団のアジトは沢山の部屋に  
別れていて、油断したら迷子になってしまいそうなくらい複雑な造  
りだった。

それからしばらく歩くと、リシュがふと足を止めた。

「ここね」

リシュが指したドアの隙間から、細い明かりが漏れている。  
2人はそこから中を覗いた。

「いた！カシスだわ」

「……でもなんか、様子がおかしくないか？」

頭首らしき人物がわなわなと震えている。

その手には、金貨。

「てめえ！どうゆう事だ？こいつは偽物だ！」

頭首の怒声があがる。

周りの奴らの視線がカシスに集中した。

「マズい！」

ウラクが小声で叫んだ。同時に詠唱を始める。

「……………どう落とし前つけてくれるんだ？」

「……………その身に輝きを宿す聖霊よ……………」

ドオン！

リシュがドアを蹴り開けた。部屋中の視線が移動する。

「その魂に一瞬の煌めきを！【フラッシュ】！」

ウラクの手から飛び出した光球が弾ける。辺りに強烈な閃光が走った。

「うわあ！」

「うおおお！」

思い思いの叫びが聞こえる。何人かが気絶して倒れる音が聞こえる。

数秒後、光が晴れた。だが、目を開いていた者については、まだ光が眼球に張り付き取れていないだろう。

「ナイスです、ウラク様」

「うお！」

カシスがいつの間にかウラクの横にいた。光っている間から移動していたらしい。

「防御魔法は得意分野ですから……【リカバリ】」

光にやられオロオロしていたリシュの目に手を被せ、唱える。しかも、少数の人間にしか使用できない詠唱破棄で。

「え？……あ、カシス！今のは？」

目が治ったりリシュはカシスを見つけて驚いた様子だった。しかし、カシスもウラクも部屋の奥を見据えている。

「ウラク様の魔法ですよ、リシュ。それより……敵もまだまだ元気みたいですね」

二人の視線の先には頭首を含めて、十余名。頭首は怒りに、肩を震わせている。

「てめえら……覚悟は出来てるんだろうなあ？オメエら、かかれ！」

数人が飛びかかって拳打を放ってくる。

「1人でやる」

そう言ってウラクは1人で前に出た。

「な！？1人じゃ危険よ！」

「大丈夫ですよ。ほら、見ていて下さい」

ウラクはそれを1人で応戦し、攻撃を避け、逆に相手の鳩尾に掌底を叩き込んでいる。

「【ファイヤボール】！」

後衛の人間が、詠唱をしていた魔法を放つ。  
炎の属性の下級魔法。

「【ファイヤボール】！」

ウラクが叫ぶ。

すると同時に、同じ数の、いやそれ以上の火球が出現した。  
先程のカシスと同じ、詠唱破棄。それも、複数。

ドオオーン！

爆発音。

ウラクが放ったファイヤボールは、相手のファイヤボールを巻き込んで爆発した。  
向こうで健在なのは、頭首ただ1人。

「ひっ、た助けてくれ。宝石ならやる！はははっ、なんなら一緒に金儲けしようぜ！な、な？」

無言でウラクは一步踏み出す。

「リシュ、下がった方がいい。少しやりすぎてしまっつかもしれない」

ウラクはもう一步踏み出す。

「あれは……少し危険ですね。リシュ、私から離れないで」

ウラクは一步踏み出す。

「ひっ!?!」

頭首の小さな悲鳴。

今のウラクには漆黒のオーラが浮かび上がっている。

「……この国で……悲しみの涙は流させない……」

小さな、しっかり聞き取れる声。

「相当怒ってらしゃっていますね、王子。……貴方は優しすぎるかも  
しれませんね」

ウラクが前方に手を差し出す。黒いオーラは徐々に集まっていく。

「……大精霊クロニクルよ、時の代眼者の汝の名において、彼者を  
貫き時空の流れから追放せよ……地獄で反省しな!【バーバロス・  
アイ】」

ウラクの手から放たれた一筋の黒光。真っ直ぐに伸びて、頭首の眉  
間に突き刺さった。

そして、彼は徐々に消える体の感覚に恐怖を覚える。

「うわああああ!」

時の代眼者クロニクルの眼光に10秒間見つめ続けられた者は、歴

史からその存在を消されてしまう。

6……………7……………8……………9……………

ウラクは手を閉じた。

その瞬間、光は消え失せ、頭首はビビリすぎて気絶してしまった。

「ふう……………」

ウラクは足元が揺れ、倒れそうになったが、カシスが彼の体を支えた。

「クロニクルだけは絶対使ってはいけないと言いましたよね？」

「悪い」

「制御を誤れば、私もしュも……………貴方も死んでいましたよ」

「悪い」

「ふう全く……………お疲れ様です」

「……………」

ウラクの返事は無い。代わりに小さな寝息が聞こえてきた。

「ウラクは大丈夫なの？」

心配そうに顔を覗きこむリシュ。

「ええ、ちよつと疲れているだけです。さて私達は、ウラク様が起きる間に彼らを……そうですね、縛ってシバきあげますか」

そう言つて、カシスは微笑む。

王子……ふふ、貴方はやはり優しすぎますね。たけど貴方なら、【闇】を消し去る事が出来るかもしれない……。

「おおりシユ！姿が見えないから心配していたんだぞ！」

白髪の老人が、杖で体を支えながら駆け寄ってくる。

ここはリシユの村の洞窟中。ウラク達は盗魔団のアジトから戻ってきた。もちろん、あの後キツーいお灸を存分に据えてきたが。

「村長！心配かけてごめんなさい」

「いきなり居なくなっって、一体何をしていたんだ？……そちらの方々はどちらで？」

村長がウラクとカシスを疑うような目で一瞥する。村を襲われて、よそ者に強い警戒心があるのだ。

「2人は村の恩人よ！盗魔団を倒してくれたの」

「なんと！」

村長は目を丸くして驚いた。後ろで野次馬をしていた人々にもざわめきが広がる。

村長がウラク達の方に向き直る。

「ありがとうございます、ありがとうございます」

手をすり合わせ、二回大きくお辞儀をする。

「なんとお礼を言ったものか……お名前を聞かしていただけますか？」

カシスが一步前にでる。

「私はカシス・ディファ。こちらの方は、ウラク・クラウンです」

「カシス・ディファ……聞いたことがあるぞ！確か…最年少でカードに任命された天才魔術師……」

「なっ！？クラウン……王族の姓……まさかあの人が精霊王アルカディア・セイントロツクの加護の下に産まれた王子なのか」

野次馬から驚きの渦が巻き起こった。中には膝をついて敬意を表す者、二回腕を振って敬礼する者もいる。リシュは状況がまいち掴めていないのか、キョロキョロと辺りを見回している。村長もウラク達の前に膝をつき、敬礼をとった。

「なんと、なんと光栄でございます、殿下。そしてあなたは……噂の天才魔術師、緑のカシス様ですね？」

気づけば周りの村人達も村長と同じ姿勢をとっている。リシュ以外は。

「心から感謝を申し上げます、殿下。王国に精霊の加護と永遠の魔力が宿らんことを……」

周りも後に続いて、最高級の敬意の言葉を発する。リシュ以外は。彼女はまだ理解していない。

「はは、やはりバレてしまうものですね」

カシスが苦笑いをウラクに向ける。

「偽名考えとかなきゃダメだな」

ウラクは困ったような表情だった。

王族として接されるのは、どうも好きになれないらしい。

「あ！……ちょっとウラク、あなた本当に王子様なの？」

ワンテンポ遅れて、リシュも理解したらしい。口を大きく開いて驚いている。

「ねえ？ホントなの？」

「ああ、黙って悪かったな」

するとリシュは目を輝かせて、

「すごい！本物の王子に会えるなんて……でも思ってたより格好良くないわね」

と思った事を素直に吐き出した。

「うるさいわ！お前の想像でも逆に困るっ」

ウラクはちょっと怒ったが、リシュはまじまじとウラクの顔を見つめている。

「……ウラク、あなた……最初に会った時より喋るわね？」

すると、ウラクは急に視線を逸らしてしまった。横でカシスは小さく微笑んでいる。

「！……人見知りなんだよ、オレは……」

「こ、コラ、リシュ！殿下に失礼だぞ」

二人のやり取りを見ていた村長が慌ててリシュの口に手を当てて止める。

「ふっ」

「大変失礼しました、殿下。……ではどうぞ奥の方へ。粗末な所ですが、歓迎します。祝杯を上げましょう！」

\*\*\*\*\*

洞窟内の開けた空間。

松明がいつくもに灯り、ぼんやりとした光が広がっている。

「わはははは」

賑やかな笑い声。

村人達はテーブルを囲み、酒を酌み交わしている。

ウラクとカシスと、そして村長は酒の入ったカップを手に持ち、洞窟の大きな壁を見上げていた。

「……すごいですね」

カシスが感嘆の声をあげる。

三人が見上げている壁には、一面に描かれた壮大な壁画が。

「これは私達の先祖が見つけた物です。恐らくですが、古代の精霊

について描かれているらしいのです」

カシスは壁に手を触れ、文字らしきものを見つめる。

「そのようです……大精霊クロガネ……地の精霊と共に……剣を握り……深く眠る」

「読めるのですか!？」

「ええ、断片的にですが。どうやらここには、クロガネという名の  
大精霊が眠っているように」

「大精霊クロガネですか……聞いたことがありません。他にはな  
にか……」

二人が長くなりそうな話しを始めて、ウラクは一人取り残された。  
何歩か下がって、目の前の壁画を見渡した。

「ホントにでかいな……ん?あれは何だ?」

ふいに銀色の光が目映る。

近寄ってみると、それは地に刺さる細身の剣であった。

「これが……剣」

初めて目にする剣に目を奪われた。

ウラクはおそろおそろ手を伸ばす。

「ウラク様! いけません!」

カシスの声が洞窟内に響いた。それは何度も反響を繰り返した。  
ウラクは手を止め、カシスの方に振り向く。

「危なかった……ウラク様、いいですか？ 剣と魔法は相反する物です。魔法を扱える者が、自ら剣に触れるとその魔力を失ってしまうのです。絶対に触れてはいけないのですよ？」

カシスはそうとう怒っているようだ、いつもの穏やかな眼を鋭くさせている。

「悪い……分かってたんだけど、体が勝手に」

自然に、自分の意思に反して、体が剣を求めた。

「この剣から離れましょう……嫌な予感がします」

二人は剣から離れ、賑やかな明かりの中心へと向かっていった。

「ウラク、どこ言ってたのよ。飲んでる？」

「うわっ！ 酒臭っ、リシユ酔ってるのか？」

チッ

その時、暗闇の中から物音がした。だがそれに気づいた者はいない。

「酔ってないわよ」

「止めろよっ！」

「あははははは！」

ただ、洞窟には笑い声が満ちて足りていた。

……ふと気がつくや、細身の剣は姿を消していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9316a/>

---

マジックリン王国物語

2010年10月10日04時16分発行